

「底が突き抜けた」時代の歩き方 599

生物、動物の不思議な驚きの世界（その一）

写真家、作家である藤原新也の『なにも願わない手を合わせる』（平成 15.8.13 発行、東京書籍）を読んでいると、「死蝶」という題のエッセーにみられる生物の不思議さに心を打たれ、彼のそのエッセーを含めて、さまざまに記述されている「生物、動物の不思議、面白さ」を、ここでまとめてみたくなった。まずは「死蝶」のエッセーの全文引用から歩を進めてみる。

● 香川の弘法寺で父の先祖の墓に参り、香川からは西巡りに旅をした。

松山港の通りすがりに連絡船に乗ったのは、ただの思いつきだった。そこから瀬戸内海の近くの島に船が出ていると聞き、ふと内海の島に行ってみたいと思ったのだ。日帰りのつもりだったから、船の最初の寄港地である中島という島で下船し、島の周囲を巡る道を辿った。風のない晴れた日だった。穏やかな瀬戸内海の海を眺めながら歩きつづけるうちに私はいつしか時間を忘れ、気がついた時には島裏の小さな集落に辿り着いていた。

船が着く港のある方の集落には人の動きがあったが、島裏の集落は、まるで廃村のように森閑としており、その風景にはこの世から隔絶したような空気が満ちていた。

海の向こうにはいくつかの島が眺められ、中島を囲うようにして他の島々が瀬戸内海の中のもう一つの小さな内海を作りだしている、その様子がこの世からの隔絶感をもたらしているのである。しかも海はちょうど満潮時の潮止まり時にあたっていて、まるで何かを孕^{はら}んでいるかのようにふっくらとしていた。そこには光と海の満ち渡った静寂があった。

しばらくして私は静寂に包まれた島裏の一角に鮮やかな命の戯れるのを見ていた。一軒の廃屋の裏手の地面に鮮やかな金魚草の茂みがあり、その上空に7、8頭の蝶が音もなく舞っていた。

私はかたわらに捨て置かれている古びた床石に腰を下ろし、見るともなく蝶たちの舞いを眺めていた。そして少しの時を経て、あることに気づきはじめる。蝶はすべて同一種のアゲハ蝶だったが、その一頭一頭の羽の模様の鮮やかさが異なっているのが見えはじめたのだ。その中の一頭は明らかに他の蝶とは異なり、黄色と黒の燐粉のコントラストが見るからに薄くなっており、羽の縁は所々が千切れている。

これは老蝶なのじゃないか……。

私はふとそう思った。

昔からずいぶん蝶に出会ってはいるが、蝶にも年齢があるのだという、当たり前のことを思ったのはその時がはじめてだった。人間が老いると白髪になるように、おそらく蝶の場合は模様の鮮やかさが消えて行くのではないか。そんなことを思いながら、私は老蝶の飛ぶ様子を見つめていた。老蝶は他の蝶に比べ羽ばたきにも力強さがなかった。しかしその羽ばたきがとつぜん活発になった一瞬があった。海が潮止まり時を終えて引き潮に入り、いくぶんざわめきはじめた時のことだ。

老蝶はとつぜん飛び交う蝶の群れから抜け出し、一直線に空の方へ向かったのだ。十数メートルも昇ったかと思う。なにごとかと私は蝶の軌跡を追う。

その時のことだ。上空で蝶は不意に羽ばたくのをやめた。一瞬すべてが静止した。今まで動いていた時計の秒針がとつぜん止まる。そんな感じだった。

上空で静止した蝶はそれからちょうどグライダーが滑空するような感じで羽を微動だにさせず、一気に下降をはじめた。蝶が風に乗ってときたまそのような飛び方をするのは目にしたことはある。だが、その蝶の飛び様に、それとは何か異質なものがあつた。その上空の一点でちょうど風の糸が切れるように、ぷつつりと命の糸が切れた。そんな感じだった。

蝶は滑空しながら、金魚草の茂みの方へと向かった。再び花の蜜を求めようとしているのかな、とさらに蝶の軌跡を追う。しかし蝶はそれから、花火のように咲き乱れる赤い花々の間の暗闇に飛び込む。花の蜜を求めない蝶……。不思議な面持ちで、その一点をしばらく眺めていた。だが蝶は再び現れる気配がない。

私は蝶を確認しようと、腰の高さに生い茂る金魚草の茂みに分け入った。蝶の消えた場所に入り、茂みの中に目をやる。蝶はどこにも見あたらない。しかしそれから数瞬ののち、私の目は金魚草の間の地面に釘付けとなる。あの老蝶がいた。儚く薄いボロボロの羽をひろげたまま蝶は地面に臥せっている。手を伸ばし、指で触れる。微動だにしない。

はじめてことの次第が飲み込めた。私は一頭の蝶の臨終の瞬間をこの目で見ていたということらしかった。私は小さいころから昆虫の死体はずいぶんと見てきた。しかしその死の瞬間に出会うのは本当に希だ。かつて一度トルコでやはり蝶の臨終に立ち合ったことがあつた。

しかし次の一瞬、さらに信じられないことが目の前に展開された。死蝶の羽の下に何かその形に似た白い影のようなものがあるような気がして、蝶の羽を持ち、そっと指で持ち上げてみたのだ。

驚きというより不可解な思いに襲われた。死蝶の羽にちょうど重なり合うように、そこにはもう一頭の死蝶が横たわっていたのだ。すでにそれは死んで久しい年月が経つも

のと見え、その羽はちょうど木の葉の葉脈が浮き出るように、羽の骨格だけが白く居残ったものだった。

私はじっと立ちすくむ。

いったいこれは何だ。

その一帯にたくさんの蝶の死骸があり、その中の一頭に重なり合ったというのならそれは不思議なことでもない。しかしそこには一頭の蝶の遺骨だけしかなかった。

これは偶然の出来事なのだろうか？

それとも、ある奇跡か？

私は呆然と立ちすくんでいた。

そして、しばらくしてのち、指につまむ死蝶をそっと元の場所の蝶の死骨の上に戻してやる。

「この世はあの世を映す鏡でう、この世に起こっていることは、ほんまにまったく同じことがあの世で起こっているんじゃないよ」

中島を巡る道を再び引き返し、港へと向かう帰り道、小学校のころ家にお盆のお経を上げにきた坊さんが、トコロテンをするすると食べながら家族のみんなに自慢げに話していたあの世の話のことを思い出していた。

そのお坊さんの話を思い出した時、不意にある想念が私の脳裏をかすめた。

あの老蝶はあの世の母の遺骨に重なり合った父ではないのか。私は瀬戸内海の小さな静寂の島の一角で、そのあの世の一瞬を映す鏡をじっと見つめていたのではないか……。

港に行くと連絡船のエンジンの音が聞こえてきた。船が着くと家族とおぼしき ^{かしま} 姦しい一団が降りてきた。やがて私の想念はその小さなこの世の喧騒の中で立ち消えた。

●三人の子供と一匹の犬がいる《家の母親から聞いた話。末っ子が中学生のころだったか。犬は家族の順位に極めて敏感だというのである。だれがだれの言うことを聞いているか、という家庭内の秩序のようなものを、きちんと心得ている▼その上、その順位の中には自分も含まれている。どの家でも、犬が自分の場所と確信している位置がある。それは末っ子のすぐ上である。子供が二人いれば自分は第二位の存在、三人いれば、第三位となる……▼言われてみると、なるほどと思える行動が多い。大人や上の子供には従順だが、末っ子をないがしろにする。いきおい、末っ子と犬の間に紛争が絶えぬ。なかなか面白い観察だった。犬はたしかに集団の中での身の処し方や役割を自覚している▼犬は外部志向型、と『ネコのこころがわかる本』の著者マイケル・W・フォックス博士は書いている。「他者に支配され、他人が期待していると思われるように行動し、感じ、信じようとする」。これに対して、猫は内部志向型だ▼たしかに、猫は犬に比べれ

ば個人主義、いや個猫主義で、非順応的だ。「基本的に単独性。犬や人間のように優位者を敬い服従を表現する必要もなく、集団に受け入れてもらって地位や権力のために闘う必要もない」と、この動物行動学者は言う▼人間にも、犬型と猫型がある。組織や集団との関係に、それがよく現れる。正真正銘の犬、犬の皮を被った猫、猫になりたいくてなり切れぬ犬、自他ともに認める猫……。さまじまだ。企業犯罪が続発するので、つい、社員の「犬猫度」はどうだったのか、などと考える》（「天声人語」91.10.4 付朝日）

●米アリゾナ州の砂漠にすむカンガルーネズミは《水を飲まない。日中は穴の中にいるが、夜になると外に出て植物の種子や葉などを食べる。しかし、含水量が少ないので、食べ物から摂取する水の量はわずかである。必要な水の90%は体の中で出来る水でまかなう。

生物は生きていくためのエネルギーを体内の有機物を酸化させながら作り出している。そのときに水が発生する。1gの炭水化物が酸化されると0.6g、タンパク質では0.4g、脂肪では1.1gの水がそれぞれ発生する。カンガルーネズミは酸化水とよばれるこの水に大部分を依存して生きている。

家計に例えれば、水の収入が絶対的に少ないので、この動物は水の支出に気を配らなければならない。水分の少ない乾いたふんや濃度の高い尿を少量排泄（はいせつ）するのも、水の支出を節約するための工夫である。ネズミは足の裏を除いて汗を出さないが、カンガルーネズミはその足の裏の汗腺（かんせん）すらも少なくなっている。そのため、汗のでる量は普通のネズミの5割から6割にすぎない。

呼吸の際に吐き出す息にも多量の水分が含まれている。そこで、カンガルーネズミは呼吸による水の損失も出来るだけ少なくしようとする。鼻の穴が迷路のように複雑にいくんでいるうえに、ここには血管が集まっていない。

そのため、大気中の湿度が低くなると、鼻の出口は温度が低くなる。吐き出す息は長い鼻の穴の通路を通っているうちにやがて冷やされる。すると、息の中に含まれている水蒸気が水滴になって再び利用される。これによって水の支出はかなり節減される。

全体として砂漠にすむカンガルーネズミは普通のネズミに比べ、水の支出を三分の二以下に抑え、少ない水の収入を補っている。

水が足りないというのは森林を破壊し、河川の水質を汚すダムを造っている人間とは対照的だ。他の生物に迷惑を与えず、合理的な水の利用によって、黙々と生き続ける、この砂漠にすむ動物の姿から学ぶべきものは大きい。》（滋賀大学教授鈴木紀雄「水の話」

1991. 10. 5 付朝日）

●《「カラスの知能はイヌより高い」一。作物や生ごみを食い荒らす黒い害鳥、カラスの頭脳に関する新たな事実が、宇都宮大学農学部 杉田昭栄教授の研究で明らかになった。脳を解剖した結果、知能の高さを示す指数でネコやイヌを上回り、同教授は「数々の撃退策にも動じないカラスのしたたかさが科学的に裏付けられた」と話している。

脳の解剖は、都会でもよく見掛けるハシブトガラスを使って行われた。脳を取り出し

て重さを量ると、約十^{グラム}でニワトリの約3倍、脳一立方^{センチメートル}当たりの神経細胞は約2万個でニワトリの6倍。脳細胞が高密度で、しかも知能の高い動物に特徴的な配列構造を成していることも確認された。

一方、全体重に占める脳の重さは「脳化指数」と呼ばれ、動物の知能の高さを推し量る指数だが、ヒトの場合は0・86。カラスはこの指数が0・16で鳥類の中ではずばぬけて高かった。イルカやサルには及ばないが、0・10以下のウシやウマより高く、さらにネコの0・12をも上回った。イヌは脳化指数0・14の利口な生き物だが、カラスはイヌをも上回った。

カラスは本来、昆虫やネズミなどを捕らえて食べているが、人里近くの生活で次第に雑食化していったとされる。杉田教授は「小動物から生ごみまでさまざまなものを食べ、電柱やビルにも営巣する多様な行動が学習を引き起こし、脳の発達を促しているのではないか」と分析している。》

主な動物の脳化指数 ヒト 0.86 イルカ 0.64 チンパンジー 0.30 カラス 0.16 イヌ 0.14 ネコ 0.12 ウマ 0.10 ウシ 0.06 ブタ 0.05 ニワトリ 0.03 ウズラ 0.02 (00.8.17付神戸)

●杉田昭栄著『カラス なぜ遊ぶ』（集英社新書）によれば、カラスの最も特徴的な習性は「遊び」。つまり「生きるという目的のみの行為とは結びつかない仕草」のことだ。

公園の滑り台をすべる。くるみを食べるために硬い殻を車に轆かせる。かと思えば、電線にぶら下がって「大車輪」をやったり、雪に転がって「体形をプリント」したり。オリンピック級の体操選手やボディーペインティングのアーティストがいるとは。(中略)

著者が「カラス博士」になるきっかけは、研究していたニワトリをカラスに襲われたことだった。もと被害者が、敵であったはずのカラスにぐいぐい魅入られてしまった。

いかにもしぶといカラス。だが、実験のために捕獲された上野から、著者の研究室がある宇都宮へ運ぶのに難渋する。狭いところに長時間いると熱中症になるなど、デリケートな鳥でもあるのだ。(中略)

大都市・東京と動物の関係について、明治時代の新聞から集めた本がある。

林丈二著『東京を騒がせた動物たち』（大和書房）は、(……)「鳥の巻」では、明治39年4月の記事に、カラスが日本橋人形町のあたりのてっぺんに巣をつくった、と。都市の拡張によって庭園が減り、屋上の瓦が改良されて「土なしのもの」が増え、スズメなどは巣づくりに「大弱り」。ところがカラスは「市内を喜ぶものとみえ」とある。

都内のカラスの数が異様に増加したのは最近の20年ほどだが、明治時代にもすでに森を追われていたのか。》 (阿武秀子『サンデー毎日』04.5.2)

●『イルカが知りたい』の著者村山司によれば、《「水族館のショーでは、トレーナーとイルカはたやすく意志の疎通ができていのように見えますよね。だから、最初は研究がもっと簡単にいくように思っていたんです。ところが、美しいショーの裏には、その何

百倍もの苦労があるということがわかった。たった一つのことを教え込むのに、何ヵ月もかかるんです」

順調に訓練を重ねても、ある日突然こちらの思うように動かなくなることもよくあるのだそうだ。

「紙に描いた○と△の図形を識別させて、○だけ選ぶように訓練したとしますね。何十回かやらせて、○だけ選ぶようになったから、明日は次のステップに進みましょうということになる。そして翌日やらせてみると、前日まではあんなによくできたことが、まったくできなくなったりするんです。本当にわからなくなってしまったのか、それとも気まぐれでやる気をなくしたのか、それはわかりません。個人的には、気まぐれ説を採りたいんですがね（笑）」

最近では爬虫類などをペットにする人もいるが、やはり愛情を注いだときに微妙に応えてくれるほうがうれしいものだ。それができるのは、一部の哺乳類だけだろうと村山さんは言う。

「どんな動物でも、視力や聴力の実験をすれば、ある程度の能力があるという結果が出るでしょう。でも、嫉妬したり、やる気をなくしたり、ということはありません。やる気のないカエルなんて見たことはありませんからね（笑）。イルカには、人並みの喜怒哀楽の感情があるんです。しかも、個体によって性格が違っていて、好奇心が強くて人なつっこい個体もあれば、『おいで』と言っても決して寄ってはこない、超然としたやつもいるんです」

（『婦人公論』03. 5. 7）

●（『婦人公論』井戸端会議「サルを知る」04. 1. 22 浅香光代は女優、山極寿一は京大教授。なお、引用は飛ばしたり変形している。以降の対談もすべて同様）

山極寿一 飼育も大変です。サルを飼う難しさの一つは、尻のしつけができないこと。サルはだいたい垂れ流しです。

浅香光代 そうなの。尻具合が悪いから、おしめをしていないといけないの。

山極 なぜかという、本来、サルは野生で、毎日同じ場所に留まっているのではなく、どんどん場所を移っていきます。そしてサルが食べたものは、たとえばフルーツならその種子が地面に落ちて芽生えて、また実がなって……という具合に、自然の循環のシステムの中に入っているんですね。そのため、同じ一ヵ所で排泄しないような習性を、進化の中で作り上げてきたんですよ。

糸井重里 ああ、なるほど。植物の種をあちらこちらに蒔くわけですね。

山極 だから、大人も子どももお尻のしつけができないんです。これが、なかなか大変。それからニオイも強い。

浅香 独特のニオイがするんですよ。

山極 野生のはあまり臭わないんだけど、人間に飼われているサルは仲間がいなくて毛づくろいしないから、シラミやダニがついて毛並みやつやも悪くなる。草食動物だけど、

犬歯は相当鋭いし、爪も引っかけたら大変です。餌のやり方も難しくて、みなさん、よく誤解していますが、餌をやればサルもイヌのように喜ぶと思ってますね。そうじゃない。サルは餌をもらってもぜんぜん喜ばない。

山極 恩義を感じると思うのは人間的な考え方で、実は違う。サルにとって、相手の持っているものは自分のもの。ただ、自分よりも強いやつがそこにいたら、絶対に自分のものにはできないんです。

山極 サルにとってみれば、飼い主の浅香さんがいたら、そこにあるものは自分のものじゃない。そういう上下関係のルールは、ものすごくキッチリしてます。

浅香 だから、うちのネコがサルをかまったりすると、サルが「なんだ！」ってネコに飛びかかって大騒ぎ。

山極 サルの環境づくりは難しいです。大ハナジログエノンにしてもモナモンキーにしても、もともとは熱帯の木の上にいました。そこはものすごく快適なんです。地面に近いところは湿度が高くて、上のほうにいくとカンカン照りで乾燥しすぎる。だけどサルたちは樹冠のすぐ下にいるから、湿気もそう上がってこないし、それほど乾燥もしない。暑くもなく寒くもなく、カラカラに乾いているわけでもなく湿っているわけでもない。しかも、風がフワフワ吹いている。とても快適な環境にいる。贅沢な動物なんですよ。

糸井 いつもリゾート地にいるみたいなものだ。じゃあ、地上に下りてくる理由って、あまりないんですね。

山極 そうですね、地上のものも食べないし。移動する時に下りるくらいですか。

糸井 そんないい環境にいたサルが人間の祖先なんですよ。そこから追い出されて、チンパンジー、ゴリラ、人間が生まれた。その過程には苦労があったんでしょうね。

山極 大きな苦労がありましたよ。もともと人間の祖先はあらゆる面で弱かったんですよ。すごく弱ちくて、いい環境から追い出され、でも何とかしないといかんというので、必死になって編み出したのが二本足で歩くことでした。また、類人猿はみんなそうだけど、未熟な食べ物を消化することができない。未熟な果実にはアルカロイド、タンニンなどの二次化合物が入っていて、青梅が食べられないのと同じように、果実が熟すまで待たなくてははいけない。でも、その前にサルは食べてしまうんです。

糸井 祖先にとって不利ですね、それは。

山極 非常に弱い消化器系しか持ってないがゆえに、完熟した果実を探し歩かなきゃならない。その結果、いろいろな種類の食べ物を食べるようになりました。

浅香 うちのサルは贅沢でね。安売りのバナナは食べません。ひと山いくらの安いものを買って与えると、ポーンと足で蹴飛ばします。千疋屋さんの果物だと食べるのに(笑)。ごはんも、熱いのはイヤで、冷めたのもダメなんですね。ちょっとパサパサだと気に入らない顔をしてるから、お茶漬けにして食べさせたりして。

山極 サルは基本的に怠け者です。なるだけ苦労せず安全にいいものを食おうというの

で、知能が発達したんですからね。

浅香 食べ物と言えば、観光地でサルが人の持っているものを取ったり、ケガさせたりしてるっていうんで、山に追い返そうとしているでしょ。私、腹が立ってね。人間が野生のサルをさんざん餌づけしておいて、今度はサルが出すぎたから向こうに行け。これ、人間の勝手ですよ。

糸井 昔はサルと人間は共存していた。

山極 共存と言っても同じ場所にいたわけではなくて、サルは山奥にいました。日本人はもともと農民で畑仕事をしていましたが、そこには屈強な若者がいっぱいいて、サルが出てきたら追い払う。東北や北陸ではサルを食べていましたし、猟師もいた。サルも人間が怖くてなかなか出てきませんでした。

山極 それが今や畑に若者はいないし、じいちゃん、ばあちゃんだとサルも恐れない。さらに奥山にスーパー林道のような道ができて、そこを通ってサルが山を下りてくる。面白がって観光客が餌をやれば人間の食べるものはおいしいから、サルはそっちばかり食べるようになります。そうすると、ますます人家のほうに近づいて、もう山には帰りませんわな。

山極 今は奥山にサルがいなくなって、人家の近くにサルが群がるという現象がどこでも起こっています。

糸井 サルの行動半径というか、1日にどのくらいの範囲を動くんですか？

山極 普通は 500 メートルから 1 キロくらい。食べながら動きますが、勤勉ではないんですよ。ただ、肉食動物は一度食べれば 1～2 週間食べなくてもいいけど、サルは肉食じゃないから、毎日毎日、食べないといかんですよ。だから結局、毎朝早く起きて、動き回る。

山極 ところで浅香さん、寝る時は？

浅香 モナモンキーは檻に入れますけど、ハナジログエノンの七ちゃんは、私と一緒に横になって寝ます。七ちゃんはね、うちに来て 3 年くらいの頃、脳梗塞で倒れたんですよ。医者が「今晚がヤマです。助かってももう起きられないから、安楽死させたらどうですか」と言うのを私が怒って病院から連れ帰ったの。それからもう何年も生きてます。だけど、寝たきりの要介護で、夜は私が七ちゃんの首の下に手を入れて、もう一方の手で頭なでながら寝てるんですよ。紙おむつを下に敷いてて、ちょっと濡れたなと思うと取り替えて。食べ物は私が噛んで口からやらないとダメなの。

糸井 人間の介護と一緒にだ。

糸井 正確には、霊長類の中でも、どこからどこまでをサルと言うんですか。

山極 テナガザル、オランウータン、チンパンジー、ゴリラを類人猿と言い、この類人猿以外を普通、サルと呼びます。ほかに原猿類と呼ばれる原始的なサルがいます。鼻面が尖って湿っているのが特徴。嗅覚がけっこう残っているんですね。

山極 相当にサルをご存知だから、小さなサルよりも、表情があってコミュニケーションが取れるサルのほうがいいんですよ。実はね、サルの知能というのは「目」なんです。サルにとっては目で見てることが本当のこと。たとえばイヌでもネコでも、何か匂いがしただけ、ちょっと音がしただけで、感づく。だけどサルは目で見ないと感じない。そのかわり、浅香さんを目の前にしているといい子にしていたのが、浅香さんが後ろを向いたり、いなくなったりする時は悪さをする。

浅香 サルはこっちの顔を、本当によく見てますよ。

山極 サルは心理学者ですからね。人間のしゃべっていることはわからないから、顔の表情を見ている。だから、こっちがうまいこと言いながら、他のことを考えていると、すぐに見破ります。心の中で「今日は彼女とデートだしな」なんて思っていると、やっていることと顔つきがどこかチグハグになっている。顔には話している内容よりも、考えていることが表現されていることが多いですから、それを見抜かれて意地悪される。

糸井 山極さんにとってサルの魅力は？

山極 ウーン、ひとことじゃ言えないけれど……、イヌやネコ、ウマなんかはぜんぜん違う生き物だと思っています。ところがサルというのは人間と非常に近い。近いけれど違う——どこが違うかよくわからないんですよ。だから、そこをもっと知りたくなるのかなあ。サルと言っても、種類によってまた違うんですよ。たとえば、ニホンザルを叱ると、そのサルは他のサルを攻撃する。要するに八つ当たり。自分に向けられた攻撃を他の仲間に転嫁させてわが身を守るんです。ところがチンパンジーを叱ると、それは不当だと攻撃したり、あるいは何とか仲直りをしようとして抱きついたり、一対一の関係の中でいろいろなことを仕かけてくる。人間が誰かに何かやられて「こんちきしょう」と思って、でもそいつには勝てないから、弱い者をいじめることがありますね。これはニホンザル的。親しい者同士でもめて感情が行き違った時、どっかで仲直りしないと落ち着かないと思って、話しかけたり贈り物をしたりする。これはチンパンジー的です。

糸井 人間は両方を持っているわけですね。以前にサルの群れの権力闘争のドキュメンタリー番組を見たことがあります。まったく人間とそっくりでした。

山極 人間社会の一断面をきれいに切り取った社会です。ただ、ボスザル社会が人間と違うところは、ケンカの仲裁役がいないこと。

山極 仲裁がいないから、勝負を決しなければケンカは終わらない。そうすると、勝つヤツはいつも勝つ、負けるヤツはいつも負ける。それで階層社会がきれいにできて、ボスも一目でわかるわけです。

糸井 テレビでは、オスたちが川に石を放り込んで、しぶきの大きさを力を顕示してました。

山極 あ、それはチンパンジーやな。

糸井 ニホンザルの力の示し方は？

山極 尻尾立てて、ただクッと睨むだけ。強いサルというのは、毛が立って大きく見え

ますから、それだけでわかる。

山極 ゴリラのドラミングと相撲はまったく一緒ですよ。相撲では、四肢を踏む前に柏手を打つ。ゴリラはかわりに手で胸を打っているようなものです。実際、柏手を打つ時の、上半身を立てて腕を引き上げ、相手をグッと睨む姿勢は、まさに相手に対する威嚇です。

糸井 相撲はゴリラの闘いだっただ。

山極 歌舞伎で見得を切る。あれもゴリラのドラミング、あるいはオスのゴリラが強く見せる時にやる格好とそっくりです。美しいとか大きいとか男らしいとか、人間は無意識のうちに相手に威圧感を感じさせる体の構えや仕種を、サルから受け継いでいるんです。

糸井 暴走族のつっぱり方なんかにも、そういうつながりがあるような……。

山極 「ガンをつける」と言いますね。

山極 弱いサルは絶対に強い相手の目を見ちゃいかんのです。日本のヤクザの世界と一緒に。ガンをつけてはいけない。ただ、チンパンジーやゴリラはまた違って、弱いヤツが相手をじっと見るのは、むしろ愛情表現です。一所懸命に相手の好意を引き出そうとしてね。

浅香 それにしてもニホンザルは、ものすごく育てにくかったですよ。

山極 叱ると他のサルを攻撃したりするから、人間からすると「態度悪い」とズルく見えてしまうけど、それをしつけるわけにはいかないんです。あれが彼らの世界の道徳ですから。

浅香 私は結局、ニホンザルは手放しました。サカリはつくわ、噛みつくわで、手がつけられなかったから。

山極 ニホンザルの調教は大変です。言うことをきくように、しかもサルが理解できるように、小さい時からしつけるのは並大抵のことじゃない。

浅香 日光猿軍団の校長に会いに行ってみるとびっくりしたのは、生徒のサルが一匹むくれて舞台を出ていっちゃったの。そうしたら校長が、「檻の中に入れッ」とサルを入らせて、自分も裸になって檻の中に入ったんです。で、「この野郎、なめやがって。やるか!」とバンバン檻を叩いて、サルがその手をカッと噛んだら、「よーし」って追いかけて、今度は校長がギギギッと噛んだんです。自分がやられたのと同じように。シュンとなったサルを、「ああ、よしよし、可愛い、可愛い」ってして、「じゃあ、行くかい」と言ったら、サルはちゃんと戻って椅子に座りました。ああしてサルになめられないよう、「俺はお前より強いんだ」というのを示すんだなと思って。

山極 調教は、調教師がサルより強くななくちゃいけないし、一方で、人間的に愛してやらなければいけない。つまりサルに「これは勝てないな」と「頼れるな」という両方をわからせないといけない。

山極 こうしたニホンザルの調教は日本独特です。欧州の動物愛護団体が「動物虐待じゃないか」と見に来たけど、すごく感激して帰ったらしいですよ。

糸井 山極さんは野生のサルの生態を見に行く時、どういう距離を保つんですか。

山極 仲間入りします。動物園と野生のサルの違うところは、動物園では「馴致^{じゅんち}」ということをします。サルたちを人間の目にさらすわけだから、サルを人間に馴らさなければいけない。そのためにしつける。だけど、野生のサルの場合、われわれがサルにしつけられます。彼らの中に入ってデータを取るためには、彼らに脅威を感じさせない存在にならなくてはならない。それでなるべく彼らと同じような速度で歩き、同じ仕種をし、同じような声を出す。そうすると彼らの気持ちにもなれて、彼らの目にどういうふうに見えるかもある。最終的にはぜんぜん気かけられない存在になっていきます。

糸井 何日もそれを繰り返すわけですね。

山極 ええ。僕がいちばんつき合ったのはゴリラですね。こっちより体が大きいから、抱きすくめられたらクシャクシャ、大ケガをしてしまう。グローブのような手なんです。でも動物園のゴリラより、よほど安心です。動物園のゴリラは人間に育てられるでしょ。自分の体が大きくなっていることに気がつかず、力いっぱい遊べると思って、つい自分の本当の力を出しちゃう。野生の場合、違う動物だということを向こうは心得ていて、礼儀があるから、そーっと触って、試してくれるんです。

山極 僕も何回か遊んだことがありますけど、ある時、ドッとメスのゴリラに乗っちゃってこられたことがありますね。

山極 一瞬、「ヤバイ！」と思ったものの、持ち上げられないから、じっとしてるしかない。

糸井 その恐怖心は、きっと向こうにも伝わっていますよね。

山極 うん、怯えているな、というのをわかった上で、ちょっといじめる。(笑)

糸井 わあ、微妙なコミュニケーション。

山極 そのうち向こうもだんだん大胆になってきて、こっちの肩に顎を乗せたりして、「どうしよう」と思いました。

山極 でも、本当の一对一でそういうつき合いができて、とても幸福だったですね。2、3年経ってまた会いに行くと、向こうはちゃんと覚えていたりね。

山極 そう。いいですよお、ゴリラは。僕は人間以上だと思います。というのも、人間にはない広い世界を知っている。こせこせしていなくて、すべてを許してくれるような、チンパンジーとはぜんぜん違って、チンパンジーは頭がいいから裏を見て、その裏を前提としたやり取りをする。すごく政治的です。ゴリラは多分、裏をわかっていると思うけど、態度が一枚岩です。こうと決めたら曲げない。確固たるものがあるんですね。だから、一度僕を認めてくれたら、ずっと認めてくれるわけです。

糸井 以前に動物園の園長さんにうかがった話ですが、現役時代の千代の富士さんが動物園に来たら、ゴリラのオスがすごく暴れたんだとか。

山極 あれだけ押し出しのいい人が来たら、ゴリラは当然、好敵手だと思います。》

2007年10月5日記